文部省特選・文化庁優秀映画作品賞
教育映像祭最優秀作品賞・文部大臣賞・産業映画コンクール奨励賞

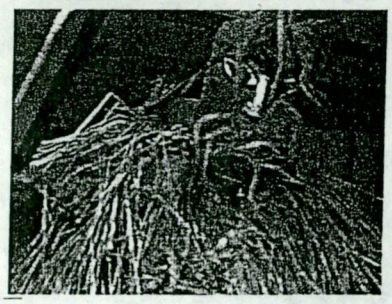
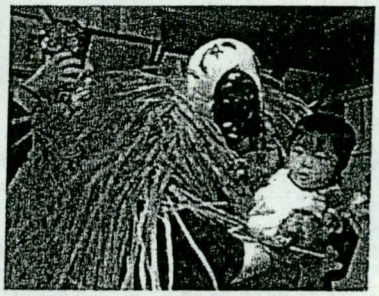
ナゴメハギとアマハゲ

－秋田・山形の来訪神行事－　（35分）

企画　国立歴史民俗博物館
協力　文　化　庁

16mmプリント　220，000－
ビデオ　50，000－

山から異形の神々がやって来て人々を戒め、これからの年の幸せを人々に与えて去っていく。“ナゴメハギ”や“アマハゲ”は、そうした来訪神行事のひとつです。荒ぶる“鬼”のイメージで知られているこれらの行事も、実は、神々の訪れを心待ちにする里人と神々が濃密に交流する心豊かな正月行事なのです。

《製作意図》

東北地方を中心に古くから行われてきた正月行事のひとつに、神のいでたちをした男たちが家々をめぐり、人々を戒めて回るという習わしがあります。一般的によく知られている秋田県男鹿半島の「ナマハゲ」もその一つです。行事の内容や呼び名は地域々々でそれぞれ少しづつ異なっていますが、日本海沿岸部に広く分布している行事です。
この映画は、秋田県能代市の「ナゴメハギ」と山形県遊佐町の「アマハゲ」の来訪神行事を記録したものです。これらはわが国の歳神信仰の一形式を伝えるものとして注目されており、こうした行事の実態を記録することによって、全国的な比較のための資料とすることを目的として製作されたものです。

《主な撮影個所》　［秋田県能代市］　浅内地区・中浅内地区・寒川地区・黒岡地区
［山形県遊佐町］　滝の浦地区・女鹿地区・鳥崎地区

株式会社 英（はなぶさ） 映画社
〒104-0028 東京都中央区八重洲2-6-13幸田ビル TEL03(3281)3414 FAX(3281)4680

［あらすじ］

正月の時期にあわせて、人里に神がおりてきて人々を戒め、祝福を与える行事が日本海沿岸の東北地方を中心に伝えられています。

秋田県能代市の浅内地区のナゴメハギもそうした行事のひとつです。
ハタハタ漁が最盛期を迎える年の瀬に、地区の青年団の手でナゴメハギが身につける「ケラ」がつくられ、家々ではナゴメハギに差し上げる餅を用意します。
大晦日、青年たちは稲藁で作ったケラをまとい、番楽の面をつけて神になり家々をまわります。『父さん、母さんの言うこと聞いているか！』『酒を飲み過ぎるなよ！』と人々を諌め、気づかい、お年寄りには『長生きしろよ！』と励ましの言葉をかけて去っていきます。

このような行事は隣接した中浅内・寒川・黒岡地区でも行われています。
10体ものナゴメハギが家々を回る中浅内。タラの木の杖を持ち鬼の面を付け、訪れた家々で酒を酌み交わし長居をしていく寒川。欅の素朴な面を付けて人々を戒めてまわる黒岡など、姿形こそ変わるものの正月を迎えるのに欠くことのできない行事です。

山形県遊佐町にもアマハゲと呼ばれる同様の行事が伝えられています。
滝の浦地区のアマハゲは１月１日の夜に行われます。行事当日ワラでケンダンと呼ばれるアマハゲの装束が作られます。ヂヂメンと呼ばれる面をつけた２体のアマハゲは、太鼓打ちの合図で家に入り、足を踏み鳴らし、福を授けて去っていきます。すべてが無言で行われる滝の浦のアマハゲには神としての性格が色濃く感じられます。

この他、１月３日女鹿地区、１月６日鳥崎地区でもアマハゲの行事が行われます。
女鹿のアマハゲは滝の浦とは異なり「ギィギィ」という奇声を発して勢いよく家に飛び込み手荒く子供達を扱います。一段落すると家の人は祝儀をわたし、酒をふるまい、アマハゲをねぎらいます。

鳥崎地区では３体のアマハゲが女鹿地区同様に荒々しく振る舞います。ここでは、他の地域では行われなくなった「鳥追い」の行事が今も子供達によって行われています。アマハゲと一緒にまわる“宵鳥”、子供達だけの“夜中鳥”“夜明け鳥”“朝鳥”と眠気をこらえて子供達は地区を巡ります。このような一連の正月行事が鳥崎地区では今も残されています。

能代のナゴメハギ、遊佐のアマハゲは、正月という区切りの時期を選んで村々を訪れ、地域や家々に繁栄をもたらす神々なのです。（平成９年12月～10年１月記録）

［スタッフ］

製作 宮下英一
企画 菅野　均
脚本 鈴木康敬
演出 八幡洋一
撮影 大洞陽祐
小林　治
嘉本哲也
長井和久

照明 前田基男
近藤裕康
大沢信夫
新井　豊
録音 杉田　信
中村裕司
演出助手 日向寺太郎

解説 馬渕晴子
撮影助手 中山憲一
西島房宏
有賀久雄
多田　勉
車両 田代秀夫
ネガ整理 長沼よし子

タイトル シネブレーン
線画 メビックス
スタジオ 東京テレビセンター
現像 IMAGICA
タイミング 三橋雅之
製作進行 伊藤春恵
製作 内海穂高

株式会社 英映画社
〒104-0028 東京都中央区八重洲2-6-13幸田ビル TEL03(3281)3414 FAX(3281)4680